

病気知らずの子育て—忘れられた育児の原点、 母乳中心、おしゃぶり、ハイハイの大切さ、 かつて世界で最もすぐれた日本の子育て

西原研究所長 日本免疫病治療研究会会長 医学博士 西原 克成

令和元年9月、富山房インターナショナルより、「0歳からの体幹遊び」を発刊しましたが、富山房インターナショナルの坂本喜杏社長より、西原克成西原研究所長、日本免疫病治療研究会会長、医学博士著の「病気知らずの子育て」(改訂版)を頂戴しました。副題として、「忘れられた育児の原点」、本の帯に「母乳中心、おしゃぶり、ハイハイの大切さ、かつて世界で最もすぐれていた日本の子育て、あたりまえで画期的な育児法を公開、「心も体もあたたかく育てよう」と記されております。

三つ子の魂の重要性を指摘されており、「0歳からの立腰・体幹遊び」と相通じる箇所がたくさんありますので、要旨を紹介させていただきます。

日本の子育ては、明治・大正・昭和を通して世界の文明国でも優れたものです。わが国では、昭和の大戦に敗れた後も、お産は普通は産婆(助産師)さんが取り上げ、子育ては出産直後から母親が直接育てました。つまり、お産も育児もほとんど猿や犬猫と同様の、見よう見真似と本能によって行われていたのです。三つ子の魂ができる2歳半までは、母乳がそれに準ずる乳児用ミルク(ヤギの乳)のみで育てれば小ぶりでピカピカで実に健やかな上に賢く育つのです。この育児法が何時からかわが国で壊れて、今日のように世界の文明国でも目を見張るほどに赤ちゃんの病気が増え、発達障害が急増したのでしょうか。詳しく探っていくと昭和41年の「スポック博士の育児書」に行きつきます。

1978年(昭和42年)に米国で乳児ボツリヌス菌症事件が起きました。これは生のハチミツを一歳未満の赤ちゃんに与えて人工乳の赤ちゃんが死亡した事件です。母乳で育てていた子は緑便か下痢だけですみ、一歳以降の人工乳の子も死を免れました。米国で2年間の調査を行った結果、新生児の腸の対微生物免疫システムが3~5歳以降の腸のそれとは全く異なることが明らかになりました。生のハチミツにはボツリヌス菌の芽胞や様々なばい菌が入っており、母乳育児の子は母乳の免疫でこれらを退治出来ますが、人工乳の子はそれがいないために、芽胞やばい菌が白血球に感染してばい菌入りの顆粒球となり、これが体中を巡りながら播種して様々な重篤な感染性の障害を起こして死亡することが明らかにされました。

赤ちゃんの腸は2歳半から3歳まではビヒズス菌以外のばい菌はすべて白血球に取り込まれて全身を巡り病気を発症するから、2歳半までは母乳中心にするようにとの結論が出ました。

これを機に1980年に米国ではスポック育児法は大統領令で追放されました。

そしてWHOも2歳過ぎまで母乳中心にするように勧告したのです。実はこの2歳半まで母乳中心の育児法が、昭和41年まで続けられていたわが国の伝統的な育児法であったのです。

ところが1980年(昭和55年)に、わが国では昭和41年に始められたスポック育児法を13、4年かけて大々的に研究し発展させ、伝統育児法を徹底的に排除し抹殺したのでした。

こうして満を持して解禁したのが昭和55年の「母子健康手帳」の改訂で、はじめて「離乳の基本」に関するガイドラインが作られ、離乳食の開始は「生後5、6月から」、子供によっては「4か月でもよい」、離乳の終了は「生後1年頃」とされました。これこそがスポック育児法そのものです。前述のようにこの年に米国ではスポックが追放され、離乳食は赤ちゃんにとってポイズン(毒)で離乳食病(アレルギーマーチ)の源としてWHOも2歳過ぎまで母乳中心になった時なのです。

こうして今や発達障害が急増し、赤ちゃんから小児の狂暴、多動、自閉症も増え続け、不登校から引きこもりも数十万、これらはすべて昭和55年(1980年)以降に激増しています。すでに37年も経過しています。日本医師会があり日本医学会もあり、小児科学会があり、精神神経学会があっても、全く対応がなくてただただ手をこまねいているばかりです。

日本の指導者は壊れてしまったのでしょうか。何とかしないと日本は駄目になってしまいます。自分の身を自衛するしか道はありません。